

デイサービス利用者の楽しみに関する研究

木村 郷太 小池 和幸

キーワード：楽しみ デイサービス

A case study on What Aspects of Commuting Long-Term Care Give Pleasure to Its Users .

Gota Kimura and Kazuyuki Koike

Abstract

The purpose of this study was to inspect activities of the commuting long-term care (day service) and the pleasure of day service users. It was the one which tries verification based on the case about the relation between the day service and the pleasure from there.

The subjects were 17 users in the Y day service center which is in I city of the M Prefecture.

The investigation executed two hearing tests to the day service users. The first test assumed 14 of servicing scenes of the day service. In the each of the 14 scenes, users noticed pleasure in the scenes. The second test investigated which of the activity of the day service or the human relation day service users makes much of day service.

Consequently, (1) The Y day service users noticed pleasure in most servicing scene. (2) The elements of the pleasure at the day service users seem to give 4 elements extracted. It was " person ", " space ", " the service activity ", " the others ". Also, the elements of the pleasure at the elderly seem to suffocate 3 elements extracted. It was " the healthily facing anxiety ", " loneliness ", " the loss of the worth living sense ". (3) It was possible to understand that the Y day service users thought both between the activity and human relation and balances two well.

Finally, pleasure feelings of the day service users brought the mutual relationship of the other users and the staffs. We think that the pleasure feelings of the elderly confused they coexist when a wide range of factors are pleasant in the relation with others.

Key words : pleasure, commuting long-term care, day service

1. はじめに

1. 研究の背景 (わが国の高齢者通所系サービスの現状)

日本の65歳以上の高齢者人口は、平成18年高齢社会白書によれば、過去最高の2,560万人となり、高齢化率も20.04%と、初めて20%を超えた。高齢者の増加に伴い、今後も高齢者の居る世帯、一人暮らし高齢者は増加を続け、家族や高齢者自身にかかる負担が大きくなっていくことが予想される¹⁾。

そこで、これらの課題を解決すべく2000年4月から導入された介護保険制度は、現在丸5年を経過し、老後の安心を支える仕組みのひとつとして一定の役割を果たし、広く認知されてきたと思われた。しかし、制度の実施とともに、当初の予想を超える介護保険の総費用の増大や、急速な高齢化などの影響により、制度の持続性が課題となっている。これらの社会的背景を基に、2006年4月に介護保険制度が大幅に改正された。この改正により、従来の介護をするサービスから、介護を受けない「介護予防」を重視した、新たな介護に対するコンセプトが打ち出された。

通所介護サービス(以下デイサービス)は、様々な障害を有する高齢者が利用している。要介護度が、要支援1から要支援2、要介護1から要介護5までと、障害の程度も異なる。

今回の改正で、デイサービスで、新たに「介護予防」を重視したサービスが提供されることになった。これは、軽度者(要支援1から要支援2、要介護1)の利用者を踏まえ、できる限り要支援・要介護状態にならない、あるいは、重度化しないようにすることが最大の目的である。

また、認知症高齢者や一人暮らし高齢者が増加している現在、住み慣れた地域で、地域の特性に応じて柔軟なサービス提供が可能となるような新たなサービス体系として「地域密着型サービス」が創設され、今まで以上にサービスの多様化が求められている。今後、増え続ける高齢者により良いサービスを提供するために、地域が一丸となって、高齢者福祉サービスの質の確保と向上が求められている。

新システムとして考えられた介護保険制度は、介護を要するものが、能力に応じて自立した日常生活を営むことができるように、必要なサービスを保険給付によって提供し、国民の保健医療の向上及び福祉の増進を図ることを目的としている²⁾。

介護予防サービスでは、従来から要支援の高齢者には「介護給付」によりサービスが提供されていたが、これらのサービスが軽度者の状態の改善・重度化防止につながっていないことや、サービスメニューが要介護者と同じのサービスであることが問題視されていた。

このため、2006年4月に施行された介護保険制度改正により、新たに予防給付が再編された(図1)。

このほかにも、今回の介護保険制度改正で、認知症の居宅要介護者に通所介護施設に通わせ、入浴、排せつ、食事などの介護その他日常生活上の世話及び機能訓練を行うことを目的とした、認知症対応型通所介護が提供されることになった³⁾。

このように、現在の日本の高齢者福祉は、「介護をする」という観点から「介護を予防する」の観点に移行している傾向にある。

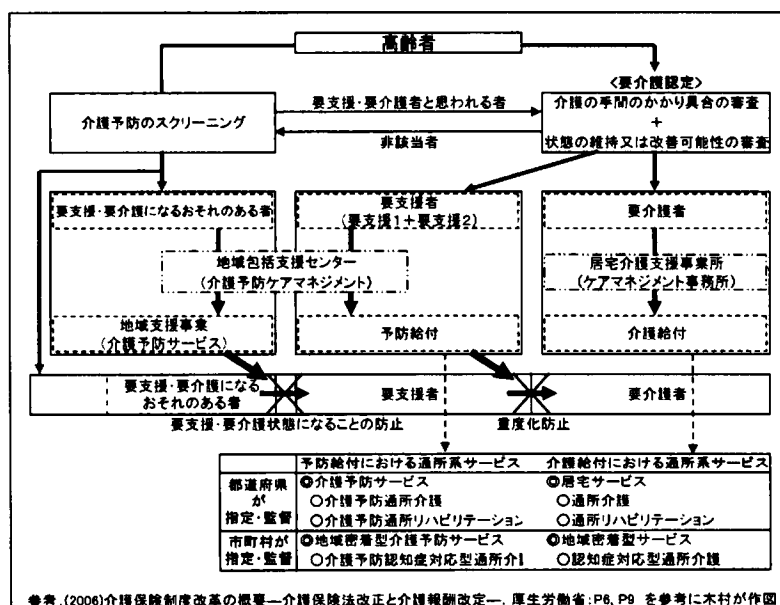


図1 現在の介護保険制度の仕組み

2. 研究の目的及び枠組み

本研究は、特にデイサービス利用者を対象に提供されるサービスとサービスに内在する「楽しみ」の要素に注目して、介護サービスと楽しみとの関係について事例を基に検証を試みるものである。

今後、高齢者のための福祉サービスの中心として、通所系のサービス形態が、重要な役割を果たすのではないかと考えた。また、サービスを提供する上で、高齢者はどこに楽しみを感じているかを理解することが、高齢者のプログラムへの強い動機付けや、高齢者自身が健康に向けて行動変容を起こしていく上で、重要な要因なのではないかと考えた。

予防重視のサービスに移行したとはいえ、介護サービスの本質は「快適な生活」への支援である。主に、衣食住に関わる生活場面が快適となるようにサービスすることが、介護の重要な視点である。

楽しいという感情は、日常生活の様々な場面で得られる感情である。しかし、この楽しいという感情は、人それぞれ感じ方や感じる状況が異なると思われる。デイサービス利用者は、どのようなサービス提供場面で楽しみを享受し、自らの生活の質へ反映しているのかを理解し、生活の質の高い介護サービスにつなげることへ寄与できるのかを考える。

本研究の枠組みは、デイサービスの開始時から終了時までの一日のスケジュールに沿って、利用者がどのサービス提供場面で楽しみを感じているのかを調査し、個々のサービス提供場面の楽しみ度を把握することである。

また、デイサービスを利用する高齢者は、デイサービスの活動、人との交流、どちらを求める傾向があるのかを調査する。この2つの調査から、デイサービス利用者の楽しみの所在を明らかにするものである(図2)。

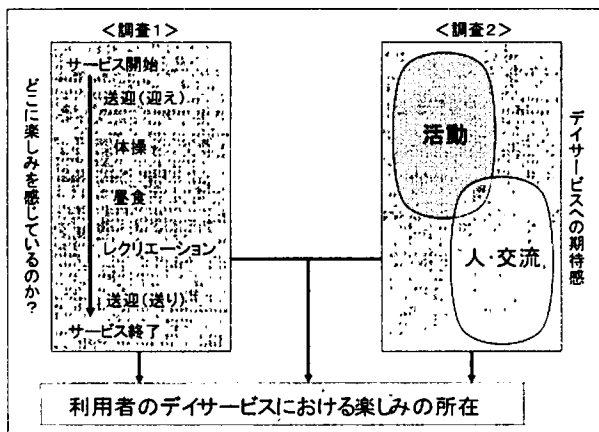


図2 本研究の枠組み

II. 「楽しみ」に関連する先行研究

1. 生活の楽しみについて

これまでの「楽しみ」研究の1つにM・チクセントミハイ (M.Csikszentmihalyi, 1979) が理論化したフロー (Flow) 理論がある⁴⁾。フローとは、自分の能力と、これから行おうとする行為の難易度のバランスが釣り合っている時に楽しみを感じるという理論のことである(図3)。このフローは日常生活の些細な行為にもフローが起こるとしている。また、チクセントミハイは、フローは「行為に没入している時に人が感じる感覚」としている。

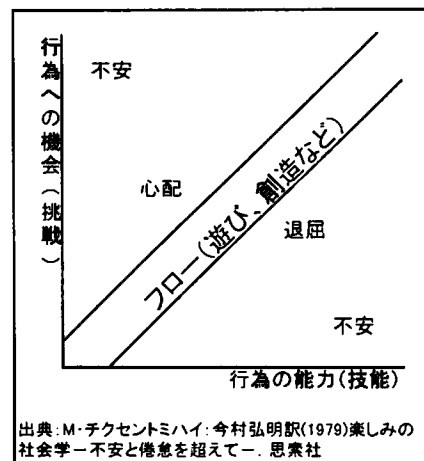


図3 フロー状態のモデル

小池 (2002) は人間が生活を快適に過ごす上で「基礎生活」「社会生活」「余暇生活」の3つの生活がそれぞれに機能している時に生活の心地よさを感じるとしている⁵⁾。つまり、人間生活を快適にする、「楽しみ」は、遊びや余暇生活の中にだけで享受されるのではなく、様々な生活場面で相互に関係しあいながら「楽しみ」感情が醸成されると考えられる(図4)。

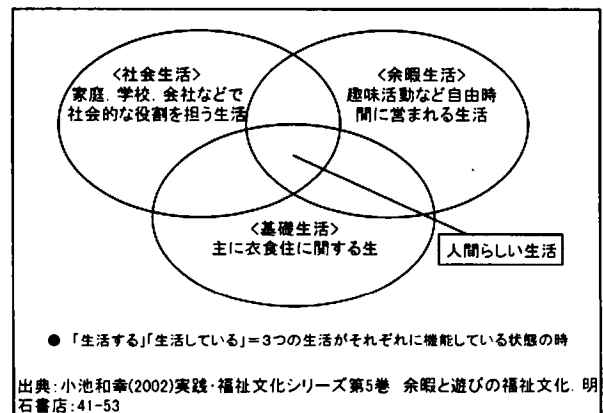


図4 人間らしい生活

久野ら (2005) は、「楽しみ」感情は他者との豊かな交流によって生ずると指摘している⁶⁾。

人見らの研究 (2002) においては、疾病や ADL の低下が楽しみ活動を制限する傾向があると指摘している。また、同研究において、デイサービスで人との交流場面があるのにも関わらず、疾病や障害の影響で「楽しみ」が制限されてしまうとの指摘もある⁷⁾。

2. 高齢者の楽しみについて

高齢者の楽しみを考える上で、「楽しみ」という要素のほかに「生きがい」や「生きがい感」という要素も深く関わってくる。

千葉は、高齢者の求める楽しさという感情の背景に生きがいという心理があるとしている。千葉が作成した生きがい援助者 PA - SR 評価スケールでは、生きがい感を居るがいを基本に 4 つのタイプに分類している⁸⁾ (図 5)。

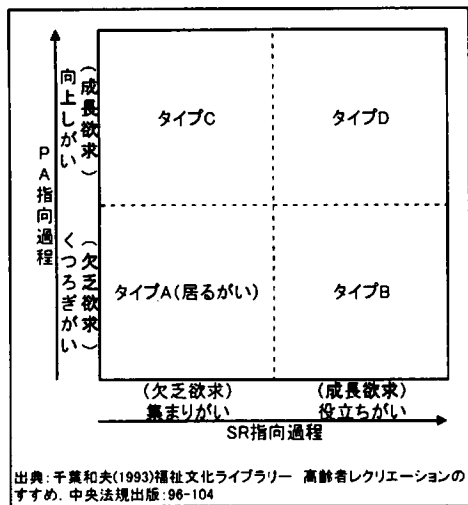


図5 生きがい獲得過程の4タイプ

百瀬らの研究 (2001) でも、高齢者は「居るがい (集うことそれ自体を求める傾向)」が楽しみにつながる効果があったとしている⁹⁾。

渕田 (2004) が行った高齢者へのインタビュー調査において、高齢者が保健福祉サービスに求めているものとして、自らの生きがいや楽しみとなる趣味活動、社会参加、人との交流、生涯学習への取り組み、役割の存在は日常生活を送る上で重要であるという意見が述べられている。また、虚弱・要介護高齢者は、デイサービスなどのサービスの利用を通して、生きがいや楽しみにつながっている特徴が示されたとしている¹⁰⁾。

これらの先行研究から、高齢者が楽しみや快を感じるために必要な要素として、①活動そのものへの満足感、

②他者との交流 (人との関わりによる仲間意識や会話の満足感)、③空間 (場所、雰囲気への満足感) の3つの要素が考えられた。

しかし、楽しみを感じる条件・要因には、共通性もあるものの、その程度や誘発要因には個人差があると考えられ、決して一面的ではないと思われる。

III. 研究方法

M県I市にある通所施設、Yデイサービスセンターの利用者17名に、面接調査法にて聞き取り調査を行った。調査期間は平成18年9月-11月までとした。

尚、本調査実施に際して、1年前より週2回程度Yデイサービスセンターへ赴き、利用者やスタッフと、活動を共にすることにより、面接調査のための信頼関係づくりを図った。

また、調査は利用者の体調やサービスの妨げにならないように配慮しながら実施した。

(1) 調査1

デイサービスにおけるサービス提供場面を、利用者の迎えから送りまでにある14場面を想定した。それぞれのサービス提供場面で「楽しみ度」を1から5の尺度で設定し、聞き取り調査を行った。

聞き取り調査の内容を録音し、逐語録としてまとめた。その内容から、デイサービスの各々サービスについて、「楽しみ」をキーワードに、「肯定的な発言」「否定的な発言」「その他」に分けて分類した。さらに、「肯定的な発言」の中から「楽しみ」の要素と思われるものを抽出した。

また、「否定的な発言」の中から、楽しみ感情を阻害すると思われる要因を同じく抽出した。

(2) 調査2

調査2は、千葉の生きがい援助者PA-SR評価スケールを基に、デイサービスにおける利用者の「楽しみの指向性」を見る調査用紙を作成し、聞き取り調査を行った。質問項目はPersonal Activity 開発指向 (以下PA指向) 6項目、Social Relation 開発指向 (以下SR指向) 6項目の合計12項目とし、1から5の尺度に設定し、聞き取り調査を行った。

PA指向とは、活動への知識や、技術の向上へ向かう指向のことである。SR指向とは、人との交流へ向かう指向のことである。

これらの調査1、調査2の結果から、総合的に利用者個々のデイサービスにおける楽しみの所在を明らかにし、デイサービス利用者の楽しみの構造や仕組みについて考察するものである。

IV. Y デイサービスセンターについて

今回調査したY デイサービスセンターは、M 県I 市にある通所施設である(表1)。施設開設から2年目で、週に6回(月曜日から土曜日)サービスを提供している。1日の最大利用者数は15名で、介護保険法の位置付けでは小規模型となっている。

表1 Y デイサービスセンターの概要

施設名	Y デイサービスセンター
施設開設日	H16.10.5
サービス提供日	週6回(月~土)、日曜日休み
1日定員	最大15名
利用者数(通所)	21名
利用者数(訪問)	8名
通所・訪問両方利用	4名
職員数	7名(管理者1名、生活相談員1名、看護師2名、機能訓練指導員(看護職員と兼務)1名、介護職員2名、事務長1名)
介護保険法上の位置づけ	小規模型
備考	通所介護の他に訪問介護も行っている。

Y デイサービスセンターでは、デイサービス事業のほかに、訪問介護事業を行っている。職員の構成は管理者1名、生活相談員1名、看護師2名、機能訓練員(看護職員と兼務)1名、介護職員2名の計7名で運営されている。Y デイサービスセンターで行われている通所介護の内容は、①生活指導、②機能訓練、③入浴サービス、④食事サービス、⑤送迎サービスの5つのサービスである。

2006年11月現在、利用者数は、女性21名で、女性だけが利用している。利用者は、要支援1が10名、要支援2が2名、経過的要介護が1名、要介護1が3名、要介護2が1名、要介護3が4名である。利用者のデイサービス利用頻度は介護度に応じて、毎日サービスを利用する人、週に1度か2度利用するなど、様々である。利用者21名の中には、通所介護と訪問介護の両方を利用している利用者も4名いる。また、介護保険を利用しない介護保険非該当者も3名いる。

1日のスケジュールは次の通りである(表2)。利用者のその日の状態を判断した上で、時間配分や内容は適宜調整される。

表2 Y デイサービスセンターの1日のスケジュール

①	8:30~9:15	利用者の送迎
②	9:15~10:00	お茶、健康チェック、朝の集い
③	10:00~12:00	体操・機能訓練、頭の体操、軽作業、歌、会話、他+入浴
④	12:00~13:00	昼食
⑤	13:00~14:30	休息
⑥	14:30~16:15	レクリエーション、趣味活動、ティータイム、会話
⑦	16:15~16:30	利用者の送迎

V. 結果

Y デイサービス利用者のうち、17名に調査を行った(表3)。調査を行った17名の介護度は、要介護3が

3名、要介護2が1名、要介護1が2名、要支援2が1名、要支援1が6名、経過的要介護が1名である。また、要介護認定はされていないが、施設のプログラムに参加している同年齢の非該当高齢者3名についても同様の調査を実施した(表4)。年齢の分布は、90歳以上の利用者が1名、80-89歳の利用者が9名、70-79歳の利用者が6名、69歳以下の利用者が1名である(表5)。

表3 利用者の介護度

要介護度	年齢	調査1	調査2
A 要介護3	84	○	○
B 要介護3	77	△*	○
C 要介護2	87	○	○
D 要介護1	85	○	○
E 要介護1	84	○	○
F 要支援2	90	○	○
G 要支援1	73	○	○
H 要支援1	79	○	○
I 要支援1	88	○	○
J 要支援1	84	○	○
K 要支援1	86	○	○
L 要支援1	78	○	○
M 経過的要介護	69	○	○
N 非該当	71	○	○
O 非該当	84	○	○
P 非該当	73	○	×
Q 要介護3	86	×	○

※ △: 逐語録なし

表4 介護度別の人数

介護度	人数
要介護3	3
要介護2	1
要介護1	2
要支援2	1
要支援1	6
経過的要介護	1
非該当	3
合計	17

表5 年齢別の人数

年齢	人数
90歳~	1
80~89歳	9
70~79歳	6
~69歳	1
合計	17

1. 調査1

(1) サービス提供場面毎の利用者の楽しみ度の調査

調査1は、送迎(迎え)、バイタルチェック、水分補給、入浴、体操、トイレ、食事、昼寝(仮眠)、職員との会話、利用者同士の会話、レクリエーション、おやつ(の時間、送迎(送り)、季節の行事(イベント)の14項目について調査を行った。楽しみ度は5に近いほど楽しみ度は高い。

それぞれのサービス提供場面における楽しみ度の平均は、高い順に、入浴5.0、食事4.9、おやつ(の時間)4.8、季節の行事(イベント)4.8、職員との会話4.7、利用者同士の会話4.7、レクリエーション4.6、体操4.4、送迎(送り)4.4、送迎(迎え)4.3、昼寝(仮眠)4.2、トイレ(排泄)4.0、水分補給3.9、バイタルチェック3.4となった(表6)。

Y デイサービスセンター利用者は、ほぼ全てのサービス提供場面で楽しみ度の平均が4以上であり、サービスに対する楽しみ度は高い。また、サービス提供場面ごとに大きな差は見られなかった。

しかし、バイタルチェックが3.4、水分補給が3.9、トイレが4.0であり、これらの項目の楽しみ度は、他の項目よりもわずかに楽しみ度が低い結果になった。

表6 利用者の楽しみ度の調査結果

	設問1	設問2	設問3	設問4	設問5	設問6	設問7	設問8	設問9	設問10	設問11	設問12	設問13	設問14	その他
A	5	3	4	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
B	3	2	3	なし	5	3	4	3	4	4	5	5	5	5	5
C	3	2	3	なし	5	2	5	4	2	4	5	5	3	5	5
D	3	3	3	なし	2	5	5	4	5	5	5	5	3	5	5
E	5	2	3	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
F	4	5	3	なし	5	5	5	5	5	5	5	4	5	5	5
G	5	5	5	5	5	5	5	なし	5	4	5	4	5	5	5
H	5	3	5	5	5	4	5	5	5	4	5	4	4	5	5
I	5	3	4	なし	4	3	5	3	4	5	4	5	5	4	4
J	4	5	5	なし	2	1	4	3	5	4	4	4	4	4	4
K	3	3	3	なし	4	5	5	5	5	5	2	5	3	4	4
L	5	4	4	なし	5	4	5	4	5	5	5	5	5	5	買利物(5)
M	5	5	5	なし	4	5	5	なし	5	5	3	5	5	5	5
N	5	3	5	なし	5	5	5	なし	5	5	5	5	5	5	5
O	4	4	5	なし	5	3	5	3	5	5	5	5	4	4	4
P	5	3	3	なし	5	4	5	5	5	5	5	5	5	5	5
平均	4.3	3.4	3.9	5.0	4.4	4.0	4.9	4.2	4.7	4.7	4.6	4.8	4.4	4.8	4.8
標準偏差	0.9	1.1	0.9	0.0	1.0	1.3	0.3	0.9	0.8	0.5	0.9	0.4	0.8	0.4	0.4

設問1: 送迎(迎え)、設問2: バイタルチェック、設問3: 水分補給、設問4: 入浴、設問5: 体操、設問6: トイレ(排泄)、設問7: 食事、設問8: 昼寝(仮眠)、設問9: 職員との会話、設問10: 利用者同士の会話、設問11: レクリエーション、設問12: おやつ時間、設問13: 送迎(送り)、設問14: 季節の行事(イベント)等

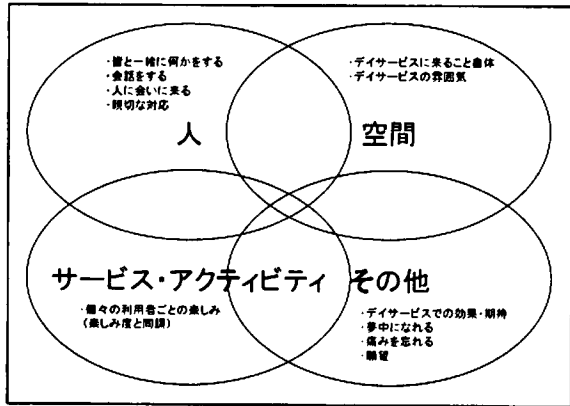


図6 肯定的な発言からの「楽しみ」要因

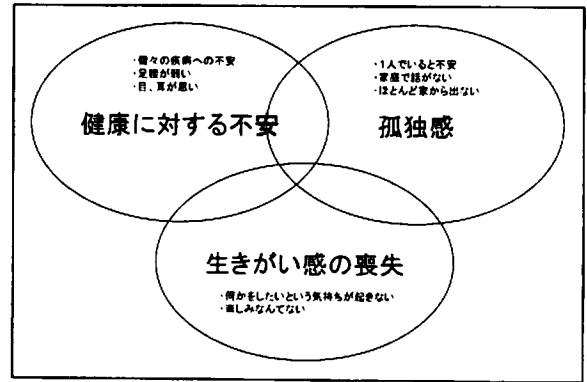


図7 否定的な発言からの高齢者の不安要因

(2) 逐語録の整理

調査1の逐語録を基に、肯定的な発言の中から、楽しみに関連すると思われる語句を分類すると、「人」、「空間」、「サービス・アクティビティ」、「その他」の4つの要素に分けられた(図6)。

「人」に関する要因では、皆と一緒に何かをするのが楽しい、会話をすることが楽しい、人に会いに来ることが楽しい、親切な対応がいいというような要素が抽出された。

「空間」では、デイサービスに来ること自体を目的にしている利用者がいるということ、またデイサービスの雰囲気に関しての要素が抽出された。

「サービス・アクティビティ」では、利用者それぞれが楽しみと感じているプログラムについての楽しみの要素が抽出された。

「その他」では、これまでデイサービスに参加しての実際の効果や期待について、また夢中になれるのがいいということ、それに伴い痛みを忘れられるのがいいということ、また、今後の願望などについて、整理できた。

これらの要素の中でも、「人」に関する要因で、ほぼ全ての利用者が、皆と一緒に何かをするということ、会話をするというものの何れか、もしくは両方の行為、体験から楽しみを感じていることが分かった。

また、「空間」に関する要因では、デイサービスに来ること自体に楽しみを感じている利用者が多く存在した。

「サービス・アクティビティ」の要因では、14項目で用いた楽しみ度がそれぞれに高いことと同調する形で、利用者個々の捉え方などは異なるものの、それぞれのサービス提供場面での楽しみの要因が確認できた。

また、否定的な発言から、高齢者の楽しみ感情を阻害すると思われる要因を抽出すると、「健康に対する不安」、「孤独感」、「生きがい感の喪失」の3つの要素に分けられた(図7)。

「健康に対する不安」では、それぞれの利用者が抱える疾病や障害への不安という要素が抽出された。

「孤独感」では、1人でいると不安、家庭で話がない、ほとんど家から出ないということが抽出された。

表7 PA指向・SR指向の調査結果

	設問1	設問2	設問3	設問4	設問5	設問6	設問7	設問8	設問9	設問10	設問11	設問12	PA合計得点	SR合計得点
A	5	5	1	1	4	2	5	2	1	5	3	5	18	21
B	2	5	5	1	1	3	4	5	2	4	2	5	17	22
C	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	12	12
D	5	3	5	1	3	3	3	5	3	3	5	5	20	24
E	2	2	2	2	2	2	2	2	1	2	1	4	12	12
F	4	5	1	1	3	3	4	5	1	3	1	4	17	18
G	5	5	4	2	5	3	5	2	4	2	2	5	24	20
H	4	5	5	1	5	2	4	5	5	4	3	5	22	26
I	4	4	5	1	3	3	4	4	5	4	2	5	20	24
J	4	4	4	1	4	4	4	3	1	2	4	4	21	18
K	2	2	1	1	3	3	3	1	3	1	1	5	12	14
L	3	5	1	1	4	3	3	2	1	1	5	2	17	16
M	2	2	2	2	2	3	2	2	3	2	3	5	13	17
N	3	4	2	3	3	3	3	2	2	4	2	2	18	15
O	4	4	3	1	3	4	5	4	3	4	2	3	19	21
Q	5	5	1	1	2	3	3	1	2	5	2	5	17	18
平均	3.5	3.9	2.8	1.4	3.1	2.9	3.4	2.9	2.4	3.3	2.3	4.3	17.4	18.6
標準偏差	1.2	1.3	1.7	0.6	1.1	0.6	1.1	1.5	1.4	1.3	1.1	1.1	3.7	4.2

設問1 私は、デイサービスにおける様々な活動(体操や工作、レクリエーションなど)の技能ができるだけ向上することを目的に参加している。
 設問2 私は、デイサービスでできるだけ多くの種類の活動に参加するようにしている。
 設問3 私は、デイサービス以外の行事や、催し物などへも、できるだけ参加している。
 設問4 私は、デイサービスで体験した活動をもとに、デイサービス以外でも同じような活動に参加している。
 設問5 私は、デイサービスで体験した活動を、より高めようとしている。
 設問6 私は、デイサービスで基礎生活に関わること(食事や入浴、薬管理など)よりも、余暇活動(体操やレクリエーション)へ参加することを中心としている。
 設問7 私は、デイサービスでは楽しい仲間作りができることを目的に参加している。
 設問8 私は、デイサービスの活動を通してデイサービス以外でも友人関係を拡大しようとしている。
 設問9 私は、デイサービスや地域のイベントや集いなど、人間交流を促進しようとしている。
 設問10 私は、デイサービスでの活動を家族や地域の人に知らせ、共に楽しもうとしている。
 設問11 私は、デイサービスの活動を通してデイサービス以外でも友人関係を拡大しようとしている。仲間や職員の手伝いをすることが好きだ。
 設問12 私は、デイサービスの仲間や職員、その地域の人と関わるのが好きだ。

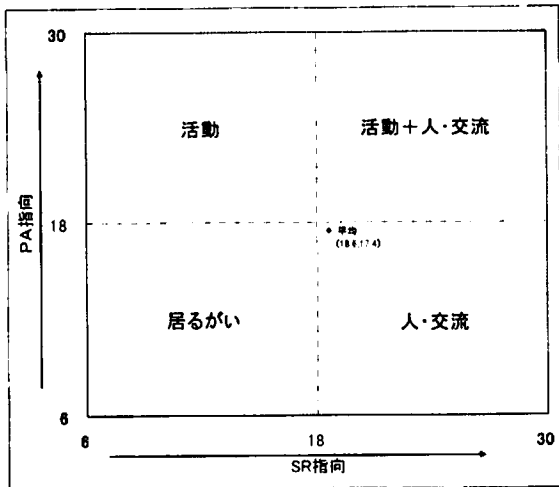


図8 Y デイサービスセンター利用者のPA指向・SR指向の平均

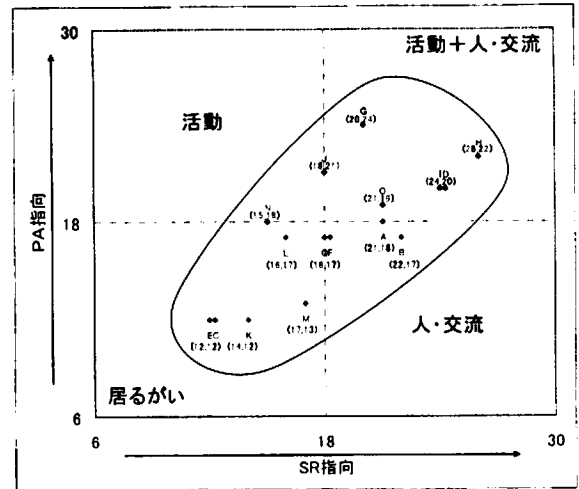


図9 Y デイサービスセンター利用者のPA指向・SR指向

「生きがい感の喪失」では、これから何かをしたいという気持ちなんて起きない、楽しみなんてないということが抽出された。

2. 調査2 (楽しみの指向性の調査)

調査2では、PA指向とSR指向の観点で、「楽しみ」の所在を分析する試みを行った(表7)。

質問項目はPA指向6項目(設問1-6)、SR指向6項目(設問6-12)の合計12項目で、1から5段階で評価を行った。

調査2の結果から、PA指向7点の平均は17.4、SR指向得点の平均は18.6だった。利用者全体の平均から傾向を見れば、人・交流指向にあるといえる(図8)。

PA指向・SR指向それぞれの得点を合計し、座標とし

て示し、利用者の分布を見た(図9)。PA指向・SR指向の最低点数は6点、最高点数は30点である。千葉の生きがい獲得過程の4タイプを参考にし、居るがいタイプを基本に、活動タイプ、人・交流タイプ、活動+人・交流タイプに分類した。

結果は、居るがいタイプと、活動+人・交流タイプに分かれた。また、利用者の中に活動だけを求めている人や、人との交流だけを求めているといった、極端に偏りのあるタイプは見られなかった。

VI. 考察

今回、高齢者のデイサービスに対する楽しみについて、デイサービス利用者の楽しみ度、逐語録、PA 指向・SR 指向の観点から評価を行った。その結果、高齢者が個人的知識・技能の向上や、人や仲間との交流など、また生きがいや、健康という様々な要因が相互に作用し合って、「楽しみ」を享受しているということが理解できた。

各サービス提供場面による楽しみ度の観点から考察すると、Y デイサービスセンターのほとんどの利用者が、デイサービスで提供される各々のメニューに対して楽しみを感じていることが分かった（表8）。

表8 14項目の楽しみ度の平均

低 ← 楽しみ度 → 高		
1	3	5
項目	平均	
① 送迎(迎え)	4.3	
② バイタルチェック	3.4	
③ 水分補給	3.9	
④ 入浴	5.0	
⑤ 体操	4.4	
⑥ トイレ(排泄)	4.0	
⑦ 食事	4.9	
⑧ 昼寝(仮眠)	4.2	
⑨ 職員との会話	4.7	
⑩ 利用者同士の会話	4.7	
⑪ レクリエーション	4.6	
⑫ おやつ(時間)	4.8	
⑬ 送迎(送り)	4.4	
⑭ 季節の行事(イベント)	4.8	

しかし、血圧測定や、トイレ介助・誘導では、他のサービスメニューほど、楽しみを感じずには至っていない。これは、Y デイサービスセンターの利用者が、比較的ADL（日常生活動作）が高く、これらの普段の日常行為そのものに困難感を有する利用者が少なかったことが考えられる。また、入浴の楽しみ度が高いのは、サービスを受ける利用者の自宅の浴室では、膝が曲げられなくて入りづらいなどの構造上の問題点や、疾病などによる制限があり、困難感を有するものの、デイサービスセンターでは、ハード面における快適性から楽しみ感情が強く誘発されていたと考える。

これらのことは、利用者のADLの状況や、自宅での生活環境によって、楽しみの程度や、表出に差が出てくることを示唆しているものと思われた。つまりADLの困難な状況が、自宅とは異なる、対称的な、デイサービスの良好な状況や、環境に身を置くことで楽しみ感情が体験しやすくなるのではないかと推測する。

利用者の肯定的な語りの中から、皆と一緒に何かをするということ、会話をするという、人と交流をするという点を重視してデイサービスを利用していることが分かる。また、デイサービスに来ること自体に楽しみを感じ

ている人や、その場所に集まって皆で何かをするということを楽しむ傾向にあるということも理解できた。デイサービスを福祉目的というよりは、交流の場として利用している利用者があることが推察できる。人と関わることの楽しさや、他者から認識されていることの安心感から得られる快が、楽しみと混在している。職員が親切であるということ、話を聞いてもらえる人がいるということ、自宅では行えないことを補助してもらえることが良いといった「親切な対応」に、楽しみ感を訴えているのはこのためだと思われる。

否定的な語りからは、「健康に対する不安」や「孤独感」、「生きがい感の喪失」という要素が、利用者の生活の中、もしくは潜在的な意識の中にあることが分かった。デイサービスを利用するのは、これらの不安や心配からの、一時的な回避という目的意識が存在するのかもしれない。肯定的な発言の中に見られる、1つ1つの要素は、正に、利用者の生活にある不安や心配の対極にある、願いや希望と同調するものだと思われた。

PA 指向・SR 指向の観点から見た結果、居るがいタイプの利用者と、活動+人・交流タイプの利用者に分かれた。これは、個人差はあるものの、活動の知識や技術の向上と、人との交流のどちらか一方だけを求めてデイサービスを利用しているという利用者は、Y デイサービスセンターの利用者の中では少なかったということである。デイサービス利用者がデイサービスに求めるものは、自分自身の活動への知識や技術の向上のみではなく、人・仲間との交流がバランスよく含まれているということがデイサービスにおける楽しみの要因になっているのではないかと考えられた。

また、PA 指向・SR 指向のどちらの指向も低い利用者であっても、調査1の楽しみ度、逐語録から、活動することや、デイサービスに来ること、その場に参加すること自体を楽しみにしているということが分かる。デイサービスに明確に高い目的がないと思われる利用者がデイサービスに求めているものは「皆で何かをする」という「居るがい」に求める部分が潜在的な目的として多くの部分を占めているように思えた。

フローの観点から利用者の楽しみを考えてみると、「他者との交流を目的にデイサービスに来ている」という発言も見られることから、自分自身がその行為に没入するというフロー的な楽しみ感というよりも、皆で何かを行うこと、自分と自分以外の他者との関係性の中で、自分の存在を確認することができたことによる安堵にも似た楽しみ感があることについても理解できた。共通の活動から得られる共通の快体験が楽しみ感情を生み出す安定した環境をつくりだしていると思われる。

これらの結果を踏まえて、デイサービスにおける利用

者の楽しみについて考えると、フローの概念による楽しみ感情というよりも、自分と他の利用者や、職員との相互の関係性の中で、楽しみ感情が誘発されているのではないかと感じた。このような他者との関係の中で、利用者は、自分自身の存在の確認や、安堵感、また共通の快体験、健康感、生きがい感などの、様々な要因が楽しみ感と共存し、楽しみ感情が混沌としているのではないかと考える(図10)。

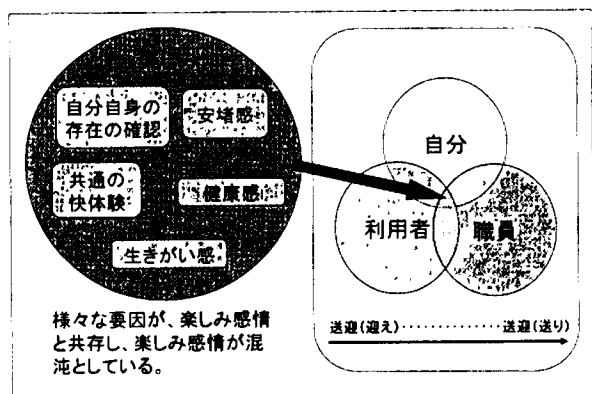


図10 デイサービスにおける高齢者の楽しみ

Ⅶ. 終わりに

本来のデイサービス事業の制度上の目的は、利用者の健康を維持するとともに、社会的孤独感の解消や、介護を行っている家族の負担軽減を目的としている。今回、Yデイサービス利用者がデイサービスに求めていることに、サービスによる身体の状態の改善だけではなく、どちらかというと人との交流や、仲間との交流ということを中心とした目的として、デイサービスに参加している利用者が多いことが分かる。また、その場に居ること自体を目的としている利用者もいることもわかった。

デイサービスのサービスを考える時に、利用者の様々なニーズから具体的な身体介護やレクリエーション的なアクティビティが選考される傾向も少なからず見られるが、実は「楽しみ」という視点で改めてデイサービスの目的やあり方を考えると、デイサービスは、利用者がただ何となく集まるだけの空間が存在するだけでも、大きな役割を担うことが可能であるように感じた。制度上の目的も、この「集まる」という環境の整備が基本にあるのだと感じた。

このように、「楽しみ感情」は、デイサービスにおいても、様々な状況で享受できる感情であり、「人」との相互作用が快適な生活を送る上で、「楽しみ感情」の表出に重要な役割を果たしている。しかし、人生の終末期にあるデイサービス利用者の「楽しみ」を研究するにあたっては、「楽しみ」と周辺にある「生きがい」や「アイデン

ティティ」のような概念などの混沌とした部分の解釈が今後の課題として考えられた。

また、今回の研究において、結果的に調査の対象が単一施設の女性高齢者のみになってしまい、高齢者の一般的な「楽しみ」研究にいたらなかった点が、今後の課題として残った。

Ⅷ. 引用・参考文献一覧

- 1) (2006) 平成18年高齢社会白書。内閣府
- 2) 服部万里子(2005) [新盤] 介護ビジネス実践ガイド。PHP 研究所
- 3) 三菱総合研究所 ヒューマン・ケア研究グループ編(2006) 図説 福祉・介護ハンドブック (第2版)。東洋経済新報社
- 4) M・チクセントミハイ：今村弘明訳(1979) 楽しみの社会学—不安と倦怠を超えて—。思索社
- 5) 小池和幸(2002) 実践・福祉文化シリーズ第5巻 余暇と遊びの福祉文化。明石書店：41-53
- 6) 久野真矢・清水一・有本真由子・前川正雄・秋吉正広(2005) 痴呆性高齢者の間で営まれる社会的交流に対する行動分析。作業療法24巻1号：60-70
- 7) 人見裕江・岩崎尚子・中村陽子・小河孝則・畷博・郷木義子・岡京子・徳山ちえみ・谷垣静子・宮林郁子・浦上克哉・稲光哲明・矢倉紀子(2002) 地域で暮らしている痴呆性高齢者の生活の満足度。米子医学雑誌53巻2号：79-89
- 8) 千葉和夫(1993) 福祉文化ライブラリー 高齢者レクリエーションのすすめ。中央法規出版：96-104
- 9) 百瀬由美子・浅原清美・大久保功子(2001) 小地域単位の住民主体による高齢者健康増進活動の評価—参加者の主観的效果を評価指標として—。日本地域看護学会誌3巻1号：46-51
- 10) 洲田英津子(2004) 保健福祉サービスにおけるエンパワメント環境の整備に関する研究—訪問面接とグループインタビューによる当事者主体のニーズ把握—。日本保健福祉学会誌10巻2号：31-40